時間知覚と談話における参照点移行

嶋田珠巳
（明海大学外国語学部）

1. はじめに

ヒト以外の動物も時間を知覚する。本発表においては、ヒトとヒト以外の動物に共通する時間の知覚に非言語と言語の繋がりを認めるところから始め、言語にあらわれる、変化過程の表示、事象順序の表示、参照点の利用による時間表示について、文例・談話例を見ながら検討する。ヒトの「こころの時間」のありようを言語を手がかりとして知るというとき、それはどのようなモデルによって可能か、を考えることを目的としてその考察を紹介する。

2. 知覚から言語表現へ

2.1　言語と非言語のインターフェイスとしての知覚

ヒトもヒト以外の動物も外界ないし環境との関わりにおいて生きている。ヒトもヒト以外の動物のいずれも、目口耳鼻などを通した外界からのインプットが中枢神経（脳のある動物においては脳）の活動を喚起して何らかの知覚を引き起こし、身体的反応をアウトプットする[1]。身体構造と機能の共通性や中枢神経での情報統御はヒトとヒト以外の動物との間に段階的なつながりを想定することができる。

単純な知覚から考え始めたい。例えば、目の前に蝶がやってきて花に止まってまた飛んでいったという状況をヒトとチンパンジーが見ているところを思い浮かべてみる。「見る」というのは知覚である。見るという意識作用によって蝶の一連の動きが知覚され、そこに時間が発生する。知覚によって対象化された、〈(蝶が）やってくる〉→〈(花に）とまる〉→〈飛んでいく〉という事態(situation)の展開とともに、この認識主体における時間は流れる。このような事態の推移はヒトの言語では「蝶が花にとまって飛んでいった」などと表現することができる。むろん、ヒト以外の動物は「言語化」しないが、知覚のレベルではヒトとの共通性があると考えられる。

2.2 時間はどこで生まれるか

(1) 蝶が花にとまって飛んでいった。

(1)の文においては動きの知覚によって時間が生じるが、動きがないところにも時間は捉えられる。これは経験主体の意識作用によるものである。フッサールの挙げたつぎの例から考える。

(2) 一本のチョークに目を向けよう。〔それから〕われわれは目を閉じ、そして開く。そのとき、われわれは二つの知覚をもつ。その場合、われわれは、同じチョークを二度見る、と言う。その際、われわれは、時間的に区別された二つの内容をもち、現象学的〔に捉えられる〕時間的な〈ひとつの外に他のひとつ〉を、〔すなわち〕分離を観て取りもするが、しかし、対象〔それ自体〕に分離はなく、対象は同じである。すなわち、対象には持続があり、現象には変転がある。
[エトムント・フッサール／谷徹 訳『内的時間意識の現象学』2016: 33-34 頁]

---

[1] 平田聡氏のご教示による。

いまこのチョークの例で考えているのは、チョークという「モノ」の知覚であるわけだが、「目を閉じ、開く」の前後の同一対象物への２つの知覚という時間による分離は、「コト」の知覚にも当てはまる。

(3) 昨年メアリは東京に住んでいた。今も東京に住んでいる。

(3)において、〈メアリが東京に住む〉という事象は１つであってもその知覚は二つに分離している。モノであれコトであれ、「目を閉じ、開く」の前後で、あるいは「昨年と今」という時間の参照を跨いで、意識の作用する２つの対象となる。

私たちが現実世界のモノやコトを知覚するとき、その知覚は対象への意識的作用である。知覚は現実世界の受動的な受け取りではなく、観察者である自己によって能動的に意識作用をはたらかせる営みである。これを、言語表現との関わりにおいて展開してみよう。現実世界のモノやコトの知覚とその知覚の言語記述はあるていど合致したものとして考えられる。意識作用なくして言語による表現はなしえない。知覚の表現として言語が最大限に機能すると考えることができるなら、ヒトとヒト以外の動物の知覚における共通性を経由して、知覚から言語表現までの連続をみとめることができる。

現実世界のコトと知覚された対象となったコトの区別は、Reichenbach (1947)による、事象(event)と、命題に対応する対象を指定する事態(situation)の区別に通じる。言語表現を扱うにあたっては、対象化された事象すなわち事態の表現として言語的あらわれを捉えるのが妥当である。

3. 言語による時間生成

言語が可能にしているのは、時間に関する次の３つの表示であると考えられる。

(i) 変化過程の表示
(ii) 事象順序の表示
(iii) 参照点の利用による時間表示

(i)は事態内時間の把握に関するものであり、(ii)と(iii)は諸事態時間構成に関するものである。そのうち、(ii)は線条的な順序に関係し、(iii)はより複雑な構造化をも可能にする。(i)と(ii)は(iii)と連動するものであるが、発話の〈イマココ〉と事態の関係づけとは独立して、変化過程を表す(i)、順序を表現することのできる(ii)と、〈イマココ〉との関係づけとさらに場合によってはなんらかの時点との関係づけを行う(iii)の時間表示をいったん分けて考える。

本稿においては、検討する文例を掲載するにとどめる。

(4) 太郎はカレーライスをおいしそうに食べている。
(5) 花子はカレーパンを一気に食べた。
(6) みんながいっせいに昼食を食べ終える。
(7) クリスマスパーティをやったら、次はカウントダウンで、そのまま初詣ですよね。
(8) 日曜日の次は月曜日だ。
(9) 加奈子さんに会った後、植物園に行った。
(10) お湯を沸かしている。
(11) 連絡してね。
(12) 東京駅に着いたら、連絡してね。
(13) コンサートが始まる２時間前に待ち合わせするとちょうどいいよ。
(14) 来週の今ごろは勝浦でゼミ合宿だ。

「参照時」や「参照点」というと、それがあることによってうまく説明できる、英語の現在完了形などが最初に思い浮かぶかもしれない。例えば、Brian has seen Laurie.という文において、参照時は出来事時と発話時の間のどこかの時点であるといったことは本発表の参照点の考えとも合致する。しかしながら、意識作用としての知覚からの連続性において時間を考える意味では、現在完了など、発話時、出来事時の他にいわば第三の時間の存在を確認するときだけに参照点があらわれるとは考えない[2]。本発表で「参照点 point of reference」と呼ぶのは、事態を捉える意識作用の投射であり、時間を捉えるにあたってはつねにこの参照点がはたらいていると考える。本発表の考察は、非言語と言語の連続、あるいはヒトとヒト以外の動物の知覚の基盤の共通項から始めたが、言語表現の分析にあたっての参照点の用語法は Reichenbach (1947)と重なる。Reichenbach はトークン反射としてテンスを捉え、その直示的(deictic)な性質を明らかにしている。

4. 現実の言語使用にみる時間

参照点の移り変わりとそれによって構成される時間について、談話を見ながら考察する。

4.1 諸事態の時間関係はどのように表されるか

次の村上春樹の小説の一節において諸事態はどのような時間関係を構成しているだろうか。

(15) 月曜日の朝遅い時間に自宅に電話がかかってきた。その日は休館日だったから、私はまだベッドに横になっていた。何時間も前から目は覚めていたが、起き上がる気にどうしてもなれなかったのだ。カーテンの隙間から明るい日差しが、まるで私の怠慢を責めるかのように、細長い一本の線となって部屋に差し込んでいた。

自宅の電話のベルが鳴ることはまずない。この町には私に電話をかけてくるような相手はほぼ存在しないからだ。休日の朝の部屋に響くそのベルの音は、ひどく現実離れしたものに感じられた。だから私は受話器をとるために身を起こしたりはしなかった。どこまでも即物的なベルの音にただじっと耳を澄ませていた。 十二回ほど鳴ってから、ようやくベルは諦めたように鳴り止んだ。

しかし一分ばかり間を置いて、ベルは再び鳴り出した。ベルの音は前回より少しばかり大きく、鋭くなったように私には感じられた。――おそらくは気のせいなのだろうが。十回ほど鳴らしておいてから、今度は私の方が諦めて起き上がり、ベッドを出て 受話器を取った。
[村上春樹 (2023)『街とその不確かな壁』525 頁. 新潮社]

本稿においては(15)の例の諸事態の関係把握に関する詳細は省くが、諸事態の順序関係、インターバル、事態どうしの並行性などが言語表現上になされている。(15)の最初の部分の時間的展開を(16)で見る。

(16) 月曜日の朝遅い時間に自宅に電話がかかってきた(e1)。その日は休館日だったから、私はまだベッドに横になっていた(s2)。何時間も前から目は覚めていた(s3)が…

電話がかかってきた瞬間には私はすでにベッドに横になっているという状態にある。「月曜日の朝遅い時間」という時の設定のなかに、〈電話がかかる〉という出来事があり、〈横になっている〉という状態があり、〈目が覚めている〉という状態がある。出来事(event)と状態(state)の判別は文脈にも影響され、語彙的意味と形態においてきれいな線が引かれるわけではないが、これらは傾向的に振る舞いが異なり、状態性の有無は時間の解釈に重要な違いをもたらすので(Kamp and Ryle 1993)、区別して扱う。

[2] 例えば Comrie (1985)は絶対テンスでは参照点を想定していないが、Reichenbach (1947)はつねに参照点を想定している。

4.2 談話における参照点

2 節で述べた知覚と言語表現の連続性と 3 節で導入した参照点の考え方を引き継いで、意識作用により捉えられた事態を言語に表すときに参照点が発生すると考える。そうすると、参照点(r で表示)と「出来事としての事態」(event, e で表示) の関係は(17)のように表せる。次の文を続けたのが(18)である。

(17)月曜日の朝遅い時間に自宅に電話がかかってきた(e1)。

$e1 \subseteq r$

(18) 月曜日の朝遅い時間に自宅に電話がかかってきた(e1)。その日は休館日だったから、私はまだベッドに横になっていた(s2)。

$e1 \subseteq r^{(i)}, r^{(ii)} \subseteq s2$

r が e1 を捉えた時点で参照点は次の事態を探す。参照点の置かれた先を区別するためにその処理が終わったものを上付きローマ数字で表すことにする。次の事態は「状態としての事態」(state, s で表示)の s2 である[3]。事態が状態の場合には参照点はその事態に含まれる。次に続く節も加える。

(19) 月曜日の朝遅い時間に自宅に電話がかかってきた(e1)。その日は休館日だったから、私はまだベッドに横になっていた(s2)。何時間も前から目は覚めていた(s3)が…

$e1 \subseteq r^{(i)}, r^{(ii)} \subseteq s2, r^{(iii)} \subseteq s3$
$r^{(i)} = r^{(ii)}$ [t_1=月曜日の朝遅い時間]
$r^{(iii)} < r^{(i)} = r^{(ii)}$ [t_2=(t_1 の)何時間も前]

「月曜日の朝遅い時間に」というフレームを与える副詞句と同様に、「何時間も前から」という副詞句も、その節の表す事態を時間軸上に位置づける。「月曜日の朝遅い時間に」というのをいわばアンカー(碇) として、s3 と e1、また s3 と e2 の関係を位置づけている[4]。このアンカーの考え方は、(19)を英訳した(19-ENG)においてより鮮明に表される。

(19-ENG) I received a call at home late on Monday morning. I was still lying in bed, as it was a holiday that day. I had been awake for hours, (DeepL を用いた翻訳, 2024 年)

三文目「何時間も前から目が覚めていた」は過去完了 I had been awake for hours で表される。英語では完了形を用いて時間のずれを表し、過去の時点をアンカーにして、時間を遡った参照を可能にしている。

このように、談話における参照点の推移を捉えることで、事態の順序関係および重複関係を見ることができる。

5. 参照点移行によって構成される時間：rR モデル

ここまでの考察から、言語に表れる私たちの時間認識は参照点を介した記述が可能であると考えられ

---

[3] 「その日は休館日だったから」節において〈休館日だ〉という事態を状態として分析に含めてもよいが簡略化した。コピュラ節は基本的に談話の時間を進めることはしない。とくに(19)においては「その日」に照応詞を含む。コピュラ文の扱いに関連して、青山・嶋田(2023: 1013)は、「7 は素数である」、「メアリーの生年は 2001 年である」という文が無時制的に存在することを論じている。

[4] ここでの「アンカー」という表現は Smith (1980)に準ずる。

る。その記述の枠組みとなる参照点移行による時間構成モデルを「rR モデル」として提案する[5]。

5.1 時間の構成に必要な情報

言語表現に現れる事態の時間的解釈がどのように与えられるのか、少し分解する形で見てみたい。できるだけ言語表現上明示的なものから順にその要素を取り出して「層」(layer)に分けていく。もちろん、現実の私たちの言語処理においては層ごとに順序立てて脳の中で処理されているわけではなく、極めて高速かつ統合的に複数の処理がなされていると考えられるので、あくまで言語分析上のことである。

言語形式に時間が明示されているものをまず[第 1 層]とする。ここには文法形式と語彙形式の意味から得られる、言語表現に基づいた時間情報が含まれる。[第 2 層]としてモノやコトに関する世界知識とそれを利用した推論によって得られる時間情報を、[第 3 層]として参照点の推移と談話構造の文脈を利用した推論によって得られる時間情報を、考える。事態の順序関係が曖昧なまま置かれていることも現実の言語使用においてはよくあることだが、[第 1 層]から[第 3 層]の情報が統合されて、時間的順序関係が談話における各文の進行ごとに決まっていくと考える。

5.2〈イマココ〉にない時空間の参照

ヒトの場合には、眼前の蝶のようになにかを見ているときだけはなく、眼前にない事態を想像するときにも時間を感じる。〈イマココ〉から離れて過去を想起したり、未来を予期することができる。例えばストーンヘンジの昔に思いを馳せたかと思えば、次の瞬間には目の前のリンゴに意識が向いたりする。あるいは子どもの頃の紙芝居。〈イマココ〉では友だちと一緒にいながら、それぞれにその物語に引き込まれる。いずれの場合にも、認識主体における時間は、意識作用の向けられた対象とともにある。

これを可能にするのは、〈イマココ〉から離れた時空間の設定である。それをここでビッグ R（space of Reference, 大きな参照時空間, big R）と名づけよう。ある発話が始まる時の発話の時空間を R0（ビッグ R ゼロ）とする。以降、談話の進行において〈イマココ〉から離れた時空間が現れるとき、R1, R2‥‥というふうにして時空間を与える。それぞれの時空間ビッグ R 内において、時間は一方向にしか進行しない。談話上の言語的手がかりによって、たとえば思い出すときにはその記憶にアクセスする新たな時空間を作る。〈イマココ〉から離れた時空間は言語表現を手掛かりとして作られる。

談話における時間の流れは、ビッグ R におけるスモール r (point of reference, 参照点, small r）の動きとして捉えることが可能であり、複数のビッグ R の関係づけによって構造化される。それぞれの R においてアクティブ r のある位置に談話における直示中心がある。rR モデルにおいては、デフォルトの知覚における非状態性の二事態の時間把握を参照点 r の移行規則に反映させている。

5.3 rR モデルの概要と適用

rR モデルの基本的な考え方を次のように整理する。

(i) [第 1 層]から[第 3 層]の情報が統合されて事態の時間的順序関係ができる。
(ii) 談話における時間の進行は参照点スモール r の移行によって作り出される。
(iii) 異なる時空間の言語的動機が現れた時にはビッグ R を導入する。
(iv) スモール r はつねにビッグ R において存在する。
(v) 談話における時間の流れはスモール r はビッグ R の想定により構造化される。

rR モデルは、こころの時間ないし意識における時間の流れを言語を手がかりに記述する試みとして提案するものである。rR モデルによって時間の流れが捉えられることを(20)と(21)の例で確認したい。

[5] rR モデルについてはこれまで Joseph Tabolt さん、鍛治広真さんと共同で検討した。

(20) よじかんめのことです。1ねん2くみの子どもたちがたいそうをしていると、空に、大きなくじらがあらわれました。まっしろいくものくじらです。「一、二、三、四。」くじらも、たいそうをはじめました。（中川李枝子『くじらぐも』）

(21) それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさんの人間の家があるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ、それが見つかったらね、トントンと戸を叩いて、今晩はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋頂戴って言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ」とお母さん狐は言いきかせました。（新美南吉『手袋を買いに』）

本稿においては分析の詳細を記せないが、rR モデルを用いた記述によって、談話における時間の構造化をとらえることができ、参照点を介して事態順序の把握が可能となること、またその把握が言語以外の知識や推論にどのように支えられているかを詳かに見ることができる。

6. おわりに

意識作用によって対象化された事象すなわち事態を表現するときに、時間は言語にあらわれる。時間認識にあたっては事態を捉える意識作用の投射としての参照点がつねにあり、参照点の移行によって、談話の展開における時間を構成すると考えられる。本発表でその提案の一部を紹介した rR モデルは参照点を介した時間構成モデルであり、談話における時間の流れの記述的枠組みとなる。とくにビッグ R は発話の〈イマココ〉以外の時間を扱うための装置である。〈イマココ〉以外の時空間を言語によって自在に構成できるところにヒトとヒト以外の動物とのおおきな差異がある。

言語はそもそも指標的に世界を構築する。時間に関しては知覚の作用域としての事態への参照が基本としてあり、複数事態の関係づけにより時間が構造化される。その言語的表現として、事態の眺め方を示して事態内部の時間的展開を表すアスペクトと、事態を〈イマココ〉の私において位置づけるダイクティックなテンスが協働する。文が連なり談話となって事態の複数性が増しても、参照点を介して時間は構成されてゆく。言語を中心にして眺めれば、時間はその指標的性質を最大限に活かした構成物である。

参考文献

青山拓央・嶋田珠巳（2023）「時間研究における哲学と言語学の交差点」*Clinical Neuroscience* 41(8): 1010-1013.

Comrie, Bernard (1985) *Tense.* Cambridge: Cambridge University Press.

エトムント・フッサール 著, 谷徹 訳（2016）『内的時間意識の現象学』ちくま学芸文庫, 筑摩書房.

Kamp, Hans and Uwe Reyle (1993) *From discourse to logic: introduction to modeltheoretic semantics of natural language, formal logic and discourse representation theory.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Reichenbach, Hans (1947) *Elements of symbolic logic*. New York: The Macmillan Company.

Smith, Carlota (1980) Temporal structures in discourse. In: C. Rohrer (ed.), *Time, tense and quantifiers: Proceedings of the Stuttgart conference on the logic of tense and quantification*, 355–374. Halle: Max Niemeyer Verlag.